

雲には多くの種類があり、その性質は互いに異なっている。雲の性質を、雲の内側から見るものが雲物理の立場である。すなわち、観測者が雲の中に位置して、雲や雨の性質を論ずるものであり、気象学の多くの分野が雲を外側から見る立場に立っていることに対して、雲物理の著しい特色となっている。したがって、このシンポジウムで私が与えられたテーマは、次のように解釈するこ

とができよう。「自分が雲の中に包まれているとき、その雲が下界に対してどのくらいの強さの雨をもたらしているか、あるいは、これからもたらそうとしているかを推定する方法と手段について述べなさい」

今回は、昭和48年9月に、啓風丸によって三重県尾鷲沖の降雨を観測した例について、上記の限定されたテーマについて考えを述べたい。



小堀 嶽 著

砂漠——遺された乾燥の世界——

NHK ブックス, 1973, 219P, 450円

わが国でも最近水不足が問題になるようになった。国内では“もう豊かな水はなくなった。”という東京都水道局のPRが目につく。しかし、気候の上では水に恵まれたわが国では、なかなか実感が湧かない。

しかしグローバルに見ると陸地の $\frac{1}{3}$ はいわゆる乾燥地域で、昨今話題になる気候変動が人間生活に直ちに大きな影響を及ぼすのもここである。大気大循環を考える場合にも乾燥地域抜きでは取扱えないし、気象学でもわれわれはもっと乾燥地域に関心を持たなければならな

い。

本書の著者は乾燥地域研究の第一人者として著名で、世界各地の砂漠や草原を広く実地踏査した体験をもとに、本書を書いているだけに、砂漠に全く無縁の読者でも、自ら砂漠を歩いているかのような錯覚に陥る程である。

本書の内容は、日本人と砂漠、砂漠に生きる——厳しい自然・人間環境、図版・世界の乾燥地帯、砂漠の国々に——その現状と将来像、乾燥の克服——開発の問題点の6章から成っていて、巻末に本文を理解するのに役立つ文献がのせてある。遊牧の実態や砂漠の井戸であるカナートの紹介、砂漠の動植物など興味深い話題が数多く書かれている。気象に関係したものでは、砂漠で日較差が大きいために凍死した話や、集中豪雨で遭難した話も出てくる。また乾燥地帯の気候分類として Meigs の詳しい気候区分図がのせられている。

世界の環境開発とも関連して一読の価値がある書物といえよう。

(河村 武)

(*313ページからのつづき)

高橋 (1969) は、これらの両型を一括して北東風型に分類しており、その気圧配置型の解析例を示している。

文 献

岡田武松, 1935: 気象学, 改稿第2版下巻, 岩波書店, 558頁, (北高南低の型式)

同上 (Z字の型式)

高橋浩一郎, 1940: 天気図の分類について, 測候時報, 11, 265-273, (北高型)

大谷東平, 1941: 天気図と天気予報, 河出書房, 126頁, (北高南低型)

高橋浩一郎, 1955: 動気候学, 岩波書店, 316頁, (北高型), (北東風型), (北東風による雨)

高橋浩一郎, 1969: 総観気象学, 岩波書店, 385頁, (北東風型), (北東気流型)

(気象庁予報課, 百足虎治)

(*313ページからのつづき)

度に発生する。コナ・ストームの進路は一般に複雑な経路をたどるが、シンプソンによると Constant Vorticity Trajectory (C.A.V) の方法を用いると cut off low の発生などはかなりよく説明出来るようである。

(杉本 豊)